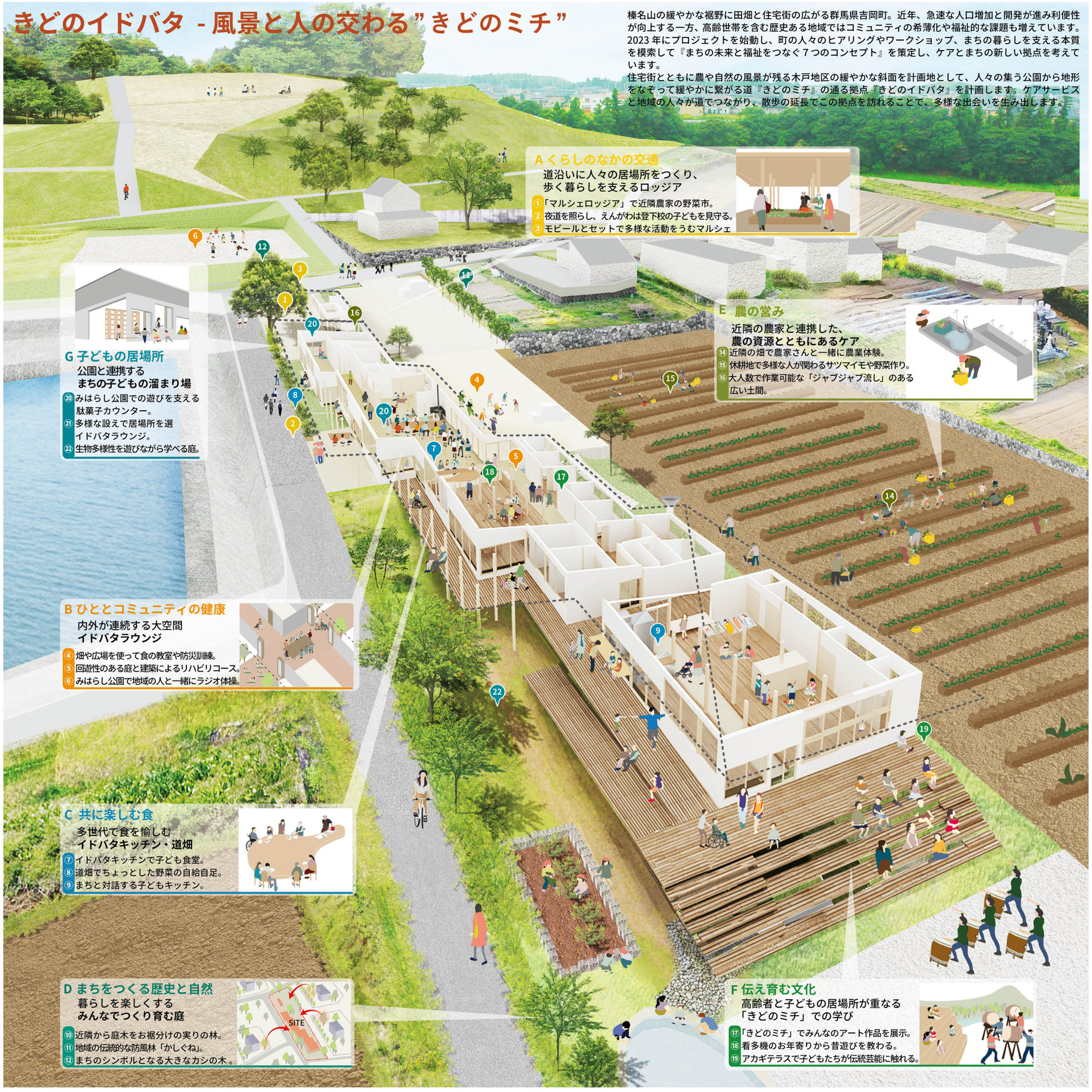
社会福祉法人　薫英会

きどのイドバタ - 風景と人の交わる”きどのミチ”

榛名山の緩やかな裾野に田畑と住宅街の広がる群馬県吉岡町。近年、急速な人口増加と開発が進み利便性が向上する一方、高齢世帯を含む歴史ある地域ではコミュニティの希薄化や福祉的な課題も増えています。2023 年にプロジェクトを始動し、町の人々のヒアリングやワークショップ、まちの暮らしを支える本質を模索して『まちの未来と福祉をつなぐ７つのコンセプト』を策定し、ケアとまちの新しい拠点を考えています。

住宅街とともに農や自然の風景が残る木戸地区の緩やかな斜面を計画地として、人々の集う公園から地形をなぞって緩やかに繋がる道『きどのミチ』の通る拠点『きどのイドバタ』を計画します。ケアサービスと地域の人々が道でつながり、散歩の延長でこの拠点を訪れることで、多様な出会いを生み出します。

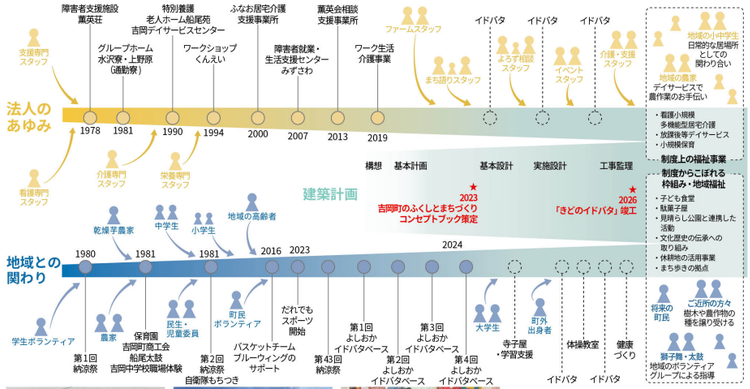


1. 一人ひとりと共に半世紀を歩んできた福祉事業と未来へのバトン
- 福祉事業者と建築家の協業によるまちづくり -

私たちは 47 年前、”地域に障がいのある人達の居場所を”という想いから障害者支援施設を開設し、一人ひとりの想いや暮らしの変化、地域ニーズに応えながら障がい福祉、高齢者福祉の事業を展開し、縦割りの制度を横断した「制度の枠にとらわれない福祉」に取り組んできました。

その歴史のなかで、私たちが大切にしてきたのは、地域との繋がりです。現在の法人拠点が住宅街から離れた場所でありながら多様な取り組みを継続しており、なかでも 40 年以上続く夏の納涼祭では 400 名以上の人々が当法人の芝生ひろばを訪れます。高齢者や障がいのある人、地域住民や子どもたちなど、あらゆる人が櫓を囲む様子は、ケアの相互作用「共生」の風景を創出しています。

2023 年、この先も地域と共に生きる風景づくりを目指し、建築家と共に地域を考える「よしおかイドバタベース」の運営を開始しました。ここで仲間たちと共に志を育てながら、これまでの福祉実践と地続きになる拠点プロジェクト「きどのイドバタ」を立ち上げ、10 年、20 年後の地域の豊かな暮らしや風景づくりへ向けた実践に挑戦していきます。

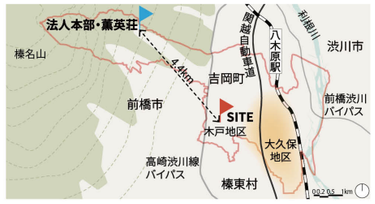


地域の憩いの吉岡町民プール　第43回 納涼祭　第3回よしおかイドバタベース WS　吉岡町のふくしとまちづくりコンセプトブック

2. 地域の特徴と敷地選定：みはらし公園と繋がり暮らしの原風景を継承する

吉岡町は群馬県で最も人口増加が大きく、榛名山の裾野田畑・牧地の広がる自然豊かな町です。移住者が多く開発が進む町の東側「大久保地区」に比して、西側は文化や歴史の面影がありながらも少子高齢化が進み、独居高齢者の住まいが増え、コミュニティの希薄化が顕在化しています。

新たな拠点を考えるにあたり複数の候補地を挙げて検討し、最終的にはこの先の福祉課題を抱えるであろう町の西側「吉岡町南下木戸地区」の一角を選定しました。農の風景とともに古くからの民家があり、町民の憩いの場である「城山みはらし公園」や貯水池などの風景に連続する土地です。この土地に、地域の原風景を継承しながら、公園で遊ぶ子供たちや農の営みと連続する新たな拠点「きどのイドバタ」を計画します。



3. まちに開く「薫英会のケア」と「７つのコンセプト」

2023 年に立ち上げた「よしおかイドバタベース」の運営と並行して、地域の人々へのヒアリングや地域への理解を深め、拠点『きどのイドバタ』の基本計画を策定し、冊子を作成しました。法人でケア事業を支えるスタッフとともに地域の子供から高齢者によって挙げられた約 600 の意見を集約し、「薫英会のケア」を核とする「７つのコンセプト」を抽出しました。

ケアの事業を基盤としながらも、そこに留まらずに制度を超えた多様な場所を創出するよう「きどのミチ」が場所と場所を繋ぎ、風景へと連続していきます。ここでは、地域の自然資源と農の風景やそれを体験する食の拠点、伝統文化を伝え育む活動、町で育てる子どもの居場所や、健康づくりの活動など、あらゆる世代・時間・背景を紡ぐ思考が、建築や庭づくりによって実現されていきます。

4. 平面計画

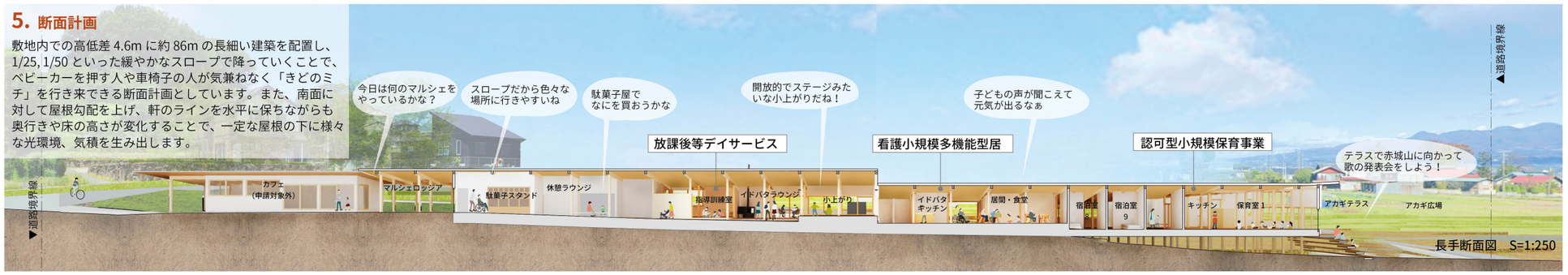
東西方向に 109m、南北に 29m という長細く緩く傾斜する地形を生かし、建物の中を穏やかに上下移動できるような、道のような建築を計画します。みはらし公園から続く「きどのミチ」を歩くと、放課後等デイサービス、看護小規模多機能型居宅介護、認可型小規模保育が連なり多世代の暮らしの場が雁行配置で展開し、自然資源の特徴を生かした外構計画とともに建物内外へと多様な居場所を計画します。

建築概要

敷地面積	2643.24 ㎡
延床面積	720.00 ㎡
用途地域等	非線引地域
構造規模	木造平屋

5. 断面計画

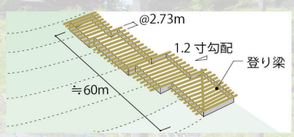
敷地内での高低差 4.6m に約 86m の長細い建築を配置し、1/25, 1/50 といった緩やかなスロープで降っていくことで、ベビーカーを押す人や車椅子の人が気兼ねなく「きどのミチ」を行き来できる断面計画としています。また、南面に対して屋根勾配を上げ、軒のラインを水平に保ちながらも奥行きや床の高さが変化することで、一定な屋根の下に様々な光環境、気積を生み出します。



6. 構造計画

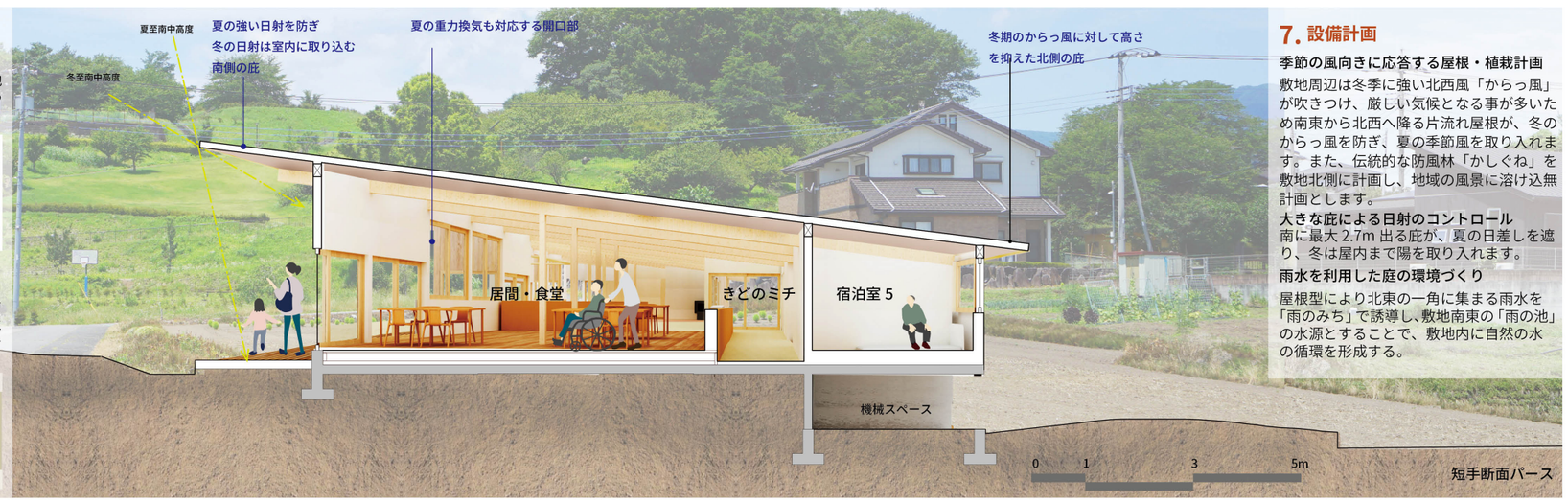
傾斜地に対応する架構計画

1.2 寸勾配の登り梁の木架構の妻面を敷地の傾斜する方向に連ねることで、ひとつながりで抑揚のある空間を計画します。



開放的な立面を実現する市松状の耐力壁

傾斜地に対して長い立面の全体に渡って開口を配置するため、耐力壁を市松状に配置し、立面の意匠性と構造の合理性を両立します。



7. 設備計画

季節の風向きに応答する屋根・植栽計画

敷地周辺は冬季に強い北西風「からっ風」が吹きつけ、厳しい気候となる事が多いため南東から北西へ降る片流れ屋根が、冬のからっ風を防ぎ、夏の季節風を取り入れます。また、伝統的な防風林「かしぐね」を敷地北側に計画し、地域の風景に溶け込む計画とします。

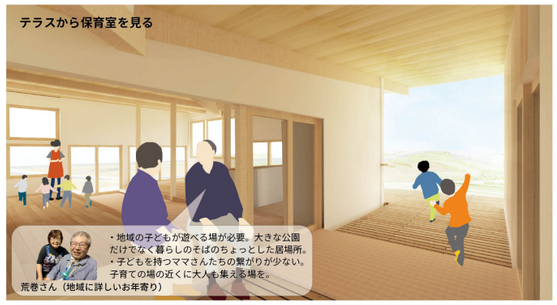
大きな庇による日射のコントロール

南に最大 2.7m 出る庇が、夏の日差しを遮り、冬は屋内まで陽を取り入れます。

雨水を利用した庭の環境づくり

屋根型により北東の一角に集まる雨水を「雨のみち」で誘導し、敷地南東の「雨の池」の水源とすることで、敷地内に自然の水の循環を形成する。

8. きどのイドバタで活動するプレイヤー



三鍋さん

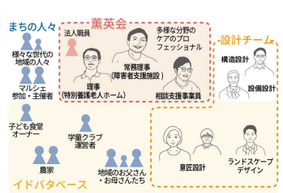
連携想定：子ども食堂
- 子どもを持つ母として、子どもの居場所の不足を感じている。
- 多世代が交流できる場所で子ども食堂や、親子料理教室、利用者も一緒にレシピを考える活動をしたい。

佐俣さん
近隣のご家族

- 既存の地域コミュニティは重要と理解しつつ、若い世代には負担が大きいと感じることもある。
- みんなが思い思いに過ごしつつ、人のつながりを感じられる緩いコミュニティ拠点があるといい。

9. この先を共に考えるチームづくり

プロジェクトの推進にあたり、引き続き福祉事業主体たる薫英会と主たる設計者間で事業実施へ向けた連携を行っていきます。今後も設計・施工期間を通じて「よしおかイドバタベース」を定期開催し、これまでに出会った地域のキーパーソンをはじめとする多様な人々と連携を深め、ケアとまちづくりの拠点としての『きどのイドバタ』のあり方をより具体的に検討して行きます。



10. 工事費高騰を見据えた建設コストの計画

昨今の建築工事費高騰を鑑み丁寧なコスト計画が重要と考えます。そこで、独立行政法人福祉医療機構が公開している福祉施設の建設費状況（令和 5 年、関東甲信、148.8 万円 / 坪）を参照し、直近の建設費上昇率から着工予定の令和 7 年までの建設費の上昇率（1.26 倍）を予測し、建設費を算出しています。